

北海道美瑛高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 159名

1 取組の特徴

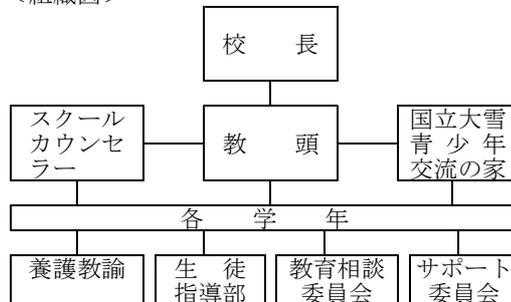
国立大雪青少年交流の家職員や富良野グループの講師によるコミュニケーションスキル向上トレーニングを実施するとともに、地域と連携を図ったボランティア活動に生徒を参加させるなど、コミュニケーションスキルを生かす機会の充実を進める。

2 取組のねらい

時と場に応じた適切な言動や周囲とのコミュニケーションをとることを苦手とする生徒が増えており、対人関係のトラブルや学校生活への不適応、非行事故の発生や中途退学などが課題である。

こうした問題の要因の一つとして、学校生活全般に対する意欲の低下やコミュニケーション能力の低下があると考えられる。

<組織図>



3 取組の経過

- 5月
 - ・希望者による町主催事業「缶トリニ作戦」でのコミュニケーションスキルを活かすボランティア活動の実施（89名参加）
 - ・スクールカウンセラーを迎えての高校生ステップアップ・プログラムについての校内研修会実施
- 6月
 - ・全学年による町主催事業「びえいヘルシーマラソン」でのコミュニケーションスキルを活かすボランティア活動の実施
 - ・3年生を対象にコミュニケーション能力向上プログラム(面接礼法指導)を実施
 - ・全学年を対象に「アセス」実施

- 9月
 - ・1年生宿泊研修においてコミュニケーション能力向上プログラムを実施
 - ・スクールカウンセラーによる「アセス」結果分析報告会実施
- 12月
 - ・全学年対象に「アセス」実施
- 1月
 - ・2年生を対象に演劇的手法を取り入れたコミュニケーション能力向上プログラムを実施
- 2月
 - ・スクールカウンセラーによる「アセス」結果分析報告会実施
 - ・職員会議において本事業の成果と課題についての検証と次年度の取組内容の確認

4 取組の内容

1 町主催事業「びえいヘルシーマラソン」でのボランティア活動の実施

- (1) 日時 平成25年6月9日(日)
- (2) 対象 全校生徒(168名)
- (3) ねらい 異年齢の人々との交流を通して、身につけたコミュニケーションスキルを活かすとともに、ボランティアの意義を学び、自己有用感を味わわせる。
- (4) 内容 マラソンの受付補助、給水所及びゴールでの給水補助、ゴールでのタイムチップ外し、記録整理、表彰、伴走など
- (5) 成果 大会ボランティアとして、「あいさつ、笑顔、両手で渡す、敬語、礼儀、身だしなみ」という6つの合い言葉のもと、一生懸命補助に努める生徒達に対して、ランナーからの「ありがとう」という言葉や、町民からの「あなたたちがいないと大会が成り立たないよ」という感謝の言葉をいただき、「人の役にたっている」という自己有用感を感じていた。また、全く知らない大人達ともその場に相応しい言動で接することを心がけることができていた。



2 「アセス」の実施(第1回)

- (1) 日時 平成25年6月26日(水)
- (2) 対象 全校生徒(168名)
- (3) 取組 結果をスクールカウンセラーに分析してもらった。

3 「アセス」の実施(第2回)

- (1) 日時 平成25年12月11日(水)
- (2) 対象 全校生徒(161名)
- (3) 取組 結果をスクールカウンセラーに分析してもらった。

4 演劇的手法を取り入れたコミュニケーション能力向上プログラムの実施

- (1) 日時 平成26年1月21日(火)
- (2) 対象 2年生全員(64名)
- (3) ねらい 心を開き合う人間関係の構築を目指し、他者を理解し重いやる心を「演劇的手法」を用いて育成する。
- (4) 内容 「進化じゃんけん」、「1、2、3ゲーム」といったアイスブレイクで集団の緊張をほぐした後、「タッチ」、「拍手回し」、「ジェスチャーゲーム」など他者理解が必要なゲームに取り組んだ。また、相手にとって望ましい話の聞き方について実演を交えて説明を受けた。
- (5) 成果 富良野グループの5名の講師の下、ゲームの中で、相手との目の合わせ方や声の出し方などの訓練に熱心に取り組んだ。この活動を通して、人間関係を上手に構築するためには、他者の状況をきちんと理解すること、心を開き、自分の考えをしっかりと伝えることが大事であることを改めて体験した。また、人の話を聞く態度について、実際の場面を演じてもらいながら望ましい話の聞き方について説明を受け、自分のこれまでを振り返るいい機会となった。



5 次年度に向けて

1 成果

- ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
1年生の中途退学者は激減した。不登校者数も減少した。
- イ その他の指標による評価
保健室の利用者数、相談者数が全学年とも減少した。1人当たりの欠席日数も1、2年生で減少した。
- ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
本校では「アセス」を実施しているが、全学年で、すべての項目がほぼ平均値で安定している。中でも、2年生の数値がやや高く、学校生活に意欲的に取り組んでいることがうかがえる。逆に、要支援領域に属する生徒の割合を見ると、「非侵害的關係」の項目の値が高く、特に2年生の数値が抜けている。学校生活に意欲をもって取り組んでいるが、友人関係において何かしら被害者意識をもっているとうかがえ、ケアが必要である。
- エ 生徒の変容した姿
学校生活において、意欲的、積極的、協力的に活動する生徒が増えてきている。人間関係を理由とした不登校や中途退学も減少しており、コミュニケーション能力を向上させることで、学校生活に満足感、充実感が得られることを感じてきている。

2 課題

- ア 学年や一部担当者だけの取組となっている部分があり、教員間の共通理解を図り、学校全体の取組としていくことが必要である。
- イ 教員主導の取組だけでは日常生活まで広がっていかない。また、「非侵害的關係」の解決に向けて、ピア・サポートを上手に取り入れ、生徒相互で助け合える機会をさらに増やす必要がある。

3 次年度に向けて

- ア 「アセス」と子ども理解支援ツール「ほっと」を併用し、より多角的に生徒個々や集団を捉えていく。
- イ ピア・サポートを取り入れるなどしながら、集団の核となる生徒の育成に努める。

北海道旭川工業高等学校

課程 定時制
 学科 工業科
 生徒数 101名

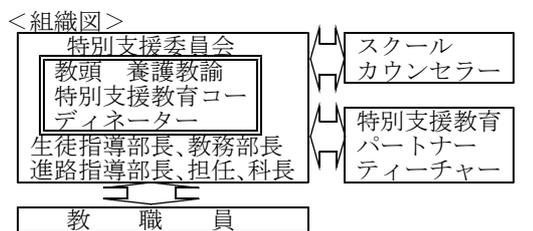
1 取組の特徴

集団カウンセリング授業等により、人間関係を形成する力やコミュニケーションスキルの向上を図り、不登校や中途退学の予防と未然防止に取り組む。

2 取組のねらい

定時制課程には様々な問題を抱えた生徒が在籍している。また、心の不安定さから他者とのコミュニケーションを上手くとれずトラブルをおこす生徒も多く、1学年の中途退学者が非常に多い。

この状態を改善するため、予防・開発的カウンセリングで生徒を支援し、学校不適應の改善を図り、社会に通用するコミュニケーションスキルを有する生徒の育成に努める。



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月 第1回特別支援委員会
アセス(1回目)
5月 個別カウンセリング①</p> <p>6月 教科担任会(1年、電気、建築、土木)
第2回、第3回特別支援委員会
個別カウンセリング②</p> <p>7月 個別カウンセリング③</p> <p>8月 集団カウンセリング①(1年電気)
個別カウンセリング④</p> <p>9月 アセス(2回目)
個別カウンセリング⑤</p> | <p>10月 集団カウンセリング②(1年電気)
集団カウンセリング(3年)
個別カウンセリング⑥</p> <p>11月 集団カウンセリング③(1年電気)
個別カウンセリング⑦</p> <p>12月 個別カウンセリング⑧
1月 アセス(3回目)
個別カウンセリング⑨</p> <p>2月 校内研修会
個別カウンセリング⑩
第4回特別支援委員会</p> <p>3月 個別カウンセリング⑪</p> |
|---|---|

4 取組の内容

- 1 集団カウンセリング①(1年電気)
- (1) 日時: 8月26日(月)
 - (2) テーマ: 「クラスで出会った仲間と楽しく過ごす」
 - (3) 1校時: アイスブレイク「イチボン」、「印象判断」
 - (4) 給食: 班毎に(教育大生を含む)
 - (5) 2校時: 全体活動、グループディスカッション
全体シェアリング



(8月26日)

4 取組の内容

2 集団カウンセリング②（1年電気）

- (1) 日 時：平成25年10月8日（火）
- (2) テーマ：「あなたへのほめ言葉を書いたのは誰？」
- (3) 2校時：アイスブレイク「Awareness Test」
- (4) 3校時：共通グランドスラム、全体活動
アイスブレイク「イチボン」



3 集団カウンセリング③（1年電気）

- (1) 日 時：平成25年11月20日（水）
- (2) テーマ：「将来を考える 仕事を考える」
- (3) 1校時：全体活動「〇〇君はこんな人」
- (4) 給 食：班毎に（教育大生を含む）
- (5) 2校時：班活動「それはどんな仕事？」
アイスブレイク「イチボン」



（10月8日）

4 アセス

- (1) 第1回 平成25年5月10日（金）
- (2) 第2回 平成25年9月20日（金）
- (3) 第3回 平成26年1月24日（金）

5 校内研修会

- (1) 日 時：平成26年1月27日（月）
- (2) テーマ：「障害者権利条約とこれからの特別支援教育」
- (3) 講 師：北海道教育大学旭川校教授 安達 潤
- (4) 内 容：14:00～15:00 講演会
15:00～16:00 事例研究（グループ討議）



（11月20日）

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者及び不登校生徒数の推移

- ・中途退学者数が前年度に比べて約35%減少した。特に、1年生の中途退学者数が半減した。

イ 評価

- ・全校生を対象にアセスを年間3回実施し、個々の生徒の「個人特性票」及び各学級の「学級内分布票」を系統的に読み取ることができた。

ウ 生徒の変容の姿

- ・スクールカウンセラーや特別支援教育パートナー・ティーチャー、教育大学生や教職員が積極的に授業に関わる中で、心を開く生徒が徐々に増えてきた。
- ・様々な「アイスブレイク」に取り組む中で生徒の興味・関心が高まり、真剣に取り組む生徒が増え、表現力や協調性も次第に生まれてきた。
- ・就職内定率が88.2%と昨年より大幅に上昇し、在学生の有職率も70%を超え、キャリア教育や就労支援にも大きな成果が見られた。

2 課題

ア より良い人間関係を育む学級づくりと中途退学者の更なる減少。

イ 卒業後も社会で通用するコミュニケーションスキルの育成。

3 次年度に向けて

ア 4月当初から1年生を対象にした集団カウンセリングを実施する。

イ 教職員自ら集団カウンセリングに取り組む。

北海道遠別農業高等学校

課程 全 日 制
 学 科 生産科学科
 生徒数 6 9 名

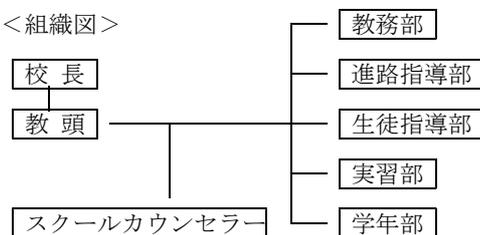
1 取組の特徴

1. 学校環境適応調査「アセス」や子ども理解支援ツール「ほっと」の結果などを活用することにより、生徒の状況を把握し、予防的教育相談を実施する。
2. 農業高校の特色を生かした販売会や異年齢交流、当番実習等の活動を通して、身に付けたコミュニケーションスキルを活用する機会を充実させ、自己肯定感を高める。
3. SGE及びグループ学習などを取り入れたLHRや授業を行う。

2 取組のねらい

- ・コミュニケーションスキルを身に付け、自己有用感を高めることを通じて、良好な人間関係や学級集団の構築を目指す。
- ・スクールカウンセラーによる集団カウンセリングや個別カウンセリングを実施し、組織的に生徒を支援する体制を強化する。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>5月 子ども理解支援ツール「ほっと」実施 (1学年)
 宿泊研修 スクールカウンセラーによるSGE・教育相談実施 (1学年)
 遠農高マルシェ・販売会 (2・3学年)
 (5～12月にかけて定期的に実施)
 学校環境適応調査「アセス」実施 (1回目)</p> <p>6月 ヒラメ底建網オーナー販売会 (3学年)
 小学生との交流学習 (2・3学年)
 (とうもろこし・枝豆播種、田植え)
 こども園との交流 (花壇造成)
 子ども理解支援ツール「ほっと」実施 (1回目)
 (2・3年)</p> <p>8月 遠別農業まつり・販売会 (2学年)</p> <p>9月 教育相談実施
 小学生との交流学習 (2・3学年)
 (とうもろこし収穫、稲刈り)</p> | <p>9月 こども園との交流 (枝豆収穫)</p> <p>10月 LHR担任によるSGE実施 (1・3学年)
 農業高校食彩フェア・販売会 (1学年)</p> <p>11月 学校環境適応調査「アセス」実施 (2回目)
 小学生との交流 (収穫感謝祭・餅つき)
 人権擁護委員によるデートDV講座 (1学年) ロールプレイ</p> <p>12月 スクールカウンセラー講演会及びスクールカウンセラー個別カウンセリング実施
 LHR担任によるSGE (1学年)
 子ども理解支援ツール「ほっと」実施 (2回目)・分析</p> <p>2月 職員会議において「ほっとの結果～成果と課題について」確認</p> <p>3月 スクールカウンセラーによるSGE (2学年)</p> |
|--|---|

4 取組の内容

(1) 教育相談の実施

- ①ねらい 学校環境適応調査「アセス」や子ども理解支援ツール「ほっと」の分析によって、クラス及び生徒個別の状況を把握し、予防的教育相談を行う。
- ②対象 21名 (分析の結果、支援を必要としていると判断された生徒)
- ③内容 教職員による教育相談の実施
- ④成果 支援を必要とする生徒の理解を深め、早期段階で対応することができた。

4 取組の内容

(2) スクールカウンセラーによるSGE (講師：スクールカウンセラー 富家 直明 氏)

- ①ねらい 新入生の緊張や不安を軽減し、他者理解を深め、新しい環境に適応させる。
- ②対象 1学年 (宿泊研修)
- ③内容 構成的グループエンカウンター
「自己紹介の輪」「共同絵画～みんなの時計」「私たちのクラス」
- ④成果 クラス内で互いを理解するきっかけとなり、コミュニケーションをとりやすい雰囲気になった。

(3) 各教科・LHRでの取組 [自己理解][他者理解]

- ・現代社会では、単元【現代社会生活と自己実現】において「自分を知ろう」「ジョハリの窓」「自分のキャリアをデザインしよう」などでグループワークを展開した。(8時間)
- ・国語は、発表しやすい雰囲気づくりを目指し、ペアワークでの作業・発表等を行った。
- ・LHRでは、「4つの窓(強制選択による自己理解)」「正方形を描く」「私の夢」「私のクラス」「友達から見た自分を知る」などのSGEを実施した。

(4) 異世代交流学習・販売会

- ①ねらい・小学生や幼児、地域住民との交流を通し、コミュニケーションスキルを育むと共に成就感や収穫の喜びを共感することで、農業に対する理解を深める。
 - ・生産物販売を通して、コミュニケーションスキルを向上させる。
- ②対象 全学年
- ③内容・小学生との交流学習
播種・田植え・収穫・餅つき等
- ・こども園との交流学習(花壇造成)
- ・アンテナショップ
「遠農高マルシェ」販売会
農業高校食彩フェア 販売会
- ④成果・子供たちに作業を教えサポートすることで充実感や自己肯定感の向上につながった。
 - ・地域と連携した取組を多く経験することで、コミュニケーションスキルを高めることができた。商品に関わる質問に答えたり、クレームに対応する場面もあり、課題解決能力と積極性が身に付いた。



花壇造成の様子



販売会の様子

(5) 当番実習

年間35時間の放課後農業実習を1～3年生混合の班編成で実施している。3年生から、作業内容を説明・指示することで、上級生の自信につながり、リーダー性・指導性・責任感が育っている。

下級生は、上級生から教わることで、今まで感じていた上級生との壁が薄くなり、和やかな雰囲気の中で実習に参加している。生徒同士の教え合い・異学年との交流によってコミュニケーションスキルの向上につながり、自尊感情も向上している。



毛刈り(羊)の様子

(6) スクールカウンセラーによる講演会・個別カウンセリング

(スクールカウンセラー 小林 宏 氏)

- ①ねらい 思春期の生徒の抱える悩み、友人関係から生じるストレスについて考える機会を持ち、自己理解を深め、ソーシャルスキルの向上につなげていく。
- ②対 象 全学年
- ③内 容
- ・高校時代の人間関係のパターンは永久には続かない。変わるものである。
 - ・広く人間関係をつくっておくことが次の段階へのステップになる。
 - ・6つの因子を紹介
 - 第1因子「本音を出さない自己防衛的な付き合い方」中学生>高校生=大学生
本音を出せない。高校生や大学生より、中学生は気にする。
 - 第2因子「誰とでも仲良くしたい付き合い方」 中学生=高校生>大学生
中・高校生は、周りが気になる。大学生は、興味関心のある人とのみ親密にする。
 - 第6因子「みんなから好かれることを願う付き合い方」中<高校生=大学生
中学生は、周りから何か言われないようにしようとする傾向がある
 - ・自傷行為～他の方法でその行為に至る気持ちを解消する。
 - ・「自分を好きになれない」から「少しでも自分を認め、いいところを探す。」
辛い状態がずっと続くわけではない。
- ④成 果
- ・人との付き合い方が成長と共に変わっていくことを知り、自分の過去を振り返るとともにこれからのことを考える機会になった。
 - ・自分と向き合うことの意味と自傷行為の代わりになる行動・自分の良いところを探すことの大切さを理解することができた。

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
 - ・中途退学者数が0名。
 - ・中学時不登校だった生徒が高校入学後には、通常の学校生活を送ることができるようになった。
- (2) 学校環境適応調査「アセス」の結果
 - ・学校への適応状態を把握することができ、授業や個別面談等に生かすことができた。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
 - ・学年が上がるに伴い、対人関係基礎項目の上昇が見られる。
- (4) 生徒の変容した姿
 - ・異年齢交流や販売会などの活動経験を重ねることで、2・3年生のコミュニケーションスキルや自己肯定感が向上した。

2 課題

- (1) 教科・HR活動などの取組の体系化
- (2) 生徒の状況に応じたトレーニング (SGE・サポート等) の実施
子供理解支援ツール「ほっと」の結果より、集団維持関連項目【5拒否】～【11リーダーシップ】のスキルの向上
- (3) 教員のスキルの向上

3 次年度に向けて

- (1) 教科・HR活動などの取組を計画する。
- (2) 構成的グループエンカウンターの計画的・継続的に実施する。
- (3) 授業や日常生活でのコミュニケーション向上に向けた言語活動を強化する。
- (4) 講師の助言を受け、教員が行うトレーニングの質を向上させる。

北海道枝幸高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 157名

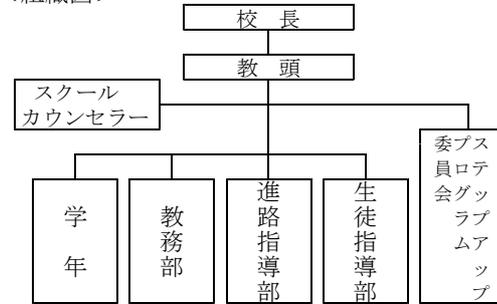
1 取組の特徴

本校ではピア・サポートトレーニングを通して、コミュニケーション能力の向上を図り、望ましい人間関係を醸成していくことを目指している。また、教員集団が集団カウンセリングの手法等を習得し、予防的・開発的教育相談の充実を目指している。

2 取組のねらい

1. ピア・サポート活動の実践
2. ピア・サポートトレーニングや構成的グループエンカウンターを通じたコミュニケーション能力の育成
3. 教職員研修を通じた、ピア・サポート活動への理解の深化

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|--|
| <p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピア・サポート研修 (校内研修会) ・構成的グループエンカウンター実施 ・ピア・サポートトレーニング ・子ども理解支援ツール「ほっと」実施 <p>5月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭科授業でのペアワーク <p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピア・サポートトレーニング ・スクールカウンセラーによる校内研修 スクールカウンセラー：齋藤敏子氏 | <p>9月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭科授業でのグループワーク <p>10月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピア・サポートトレーニング④ <p>11月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解支援ツール「ほっと」実施 ・ASSESS (アセス) 実施 <p>12月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公民科でのグループワーク <p>2月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿泊研修でのピア・サポートトレーニング (大雪青少年交流の家) |
|--|--|

4 取組の内容

1. 校内研修

- (1) 日時 ①平成25年4月4日 (木)
 ②平成25年6月26日 (水)
- (2) 対象 全教職員

- (3) 内 容
- ・本校が実施するステップアッププログラムの目的と意義についての周知を図るため、演習等の体験活動を通して実施内容の理解を深めた。
 - ・生徒理解についての講演及びピア・サポートトレーニングの体験を行い、教員のスキルアップを図った。

2. ピア・サポートトレーニング

- (1) 日 時
- ①平成25年4月11日（木）
 - ②平成25年4月12日（金）
 - ③平成25年6月26日（水）
 - ④平成25年10月21日（月）



- (2) 対 象
- 1 学年

- (3) 内 容
- オリエンテーション
 - ・アドジャン、バースデーチェーン等
 - ピア・サポート活動
 - グループワーク
 - ・足し算トーク等
 - コミュニケーションについて（ミスコミュニケーション等）
 - ・一方通行、相互通行のコミュニケーション
 - ・FELORモデル
 - 傾聴
 - 対立解消プログラム
 - ピア・メディエーション



3. 子ども理解支援ツール「ほっと」・ASSESS（アセス）の実施

- (1) 日 時
- ①平成25年4月12日（金）〈「ほっと」〉
 - ②平成25年11月18日（月）〈「ほっと」・ASSESS（アセス）〉

- (2) 対 象
- 1 学年

- (3) 内 容
- 1 学年を対象に子ども理解支援ツール「ほっと」及びASSESS（アセス）を4月と11月に実施し、生徒の状況を分析した。

4. 宿泊研修でのピア・サポートトレーニング

- (1) 日 時
- 平成26年2月3日（月）
- (2) 対 象
- 1 学年
- (3) 内 容
- アイスブレイク
 - コミュニケーショントレーニング
 - ・無人島SOS
 - ・共同絵画
- (4) 講 師
- 伊 藤 睦 郎 氏（大雪青少年の家）



5 次年度に向けて

1 成果

- ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
大きな変化は見られなかった。
- イ その他の指標による評価
プログラム実施の1学年の欠席日数と保健室利用者数は減少した。
- ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
1学年で、4月に実施した『ほっと』の結果では、対人関係基礎項目の『自己表現系』と集団維持関連項目の数値が低調であった。自己表現系の項目の得点が低く、感情や思いを適切に表現することができない生徒が多くいる現状が考えられた。結果を基に、ピア・サポートトレーニングやペアワーク、グループワークを授業等に導入し、コミュニケーションスキルの向上を図り、適切な自己表現を行える機会を意図的に設定した。
11月の結果では、『自己表現系』が向上したが『緊張』の項目で低い結果となった。今後は、『緊張』の緩和と集団維持関連項目である『賞賛』『ルールやモラル』『学業』を向上させる取組を実施したい。
- エ 生徒の変容した姿
生徒の人間関係能力やコミュニケーション能力の向上が図られ、集団活動を苦手とする生徒も、本プログラムの実施を通して、徐々に集団活動に取り組めるようになってきている。

2 課題

- ア 全校生徒を対象に本プログラムを実施するなど、継続性のある実施形態を検討する必要がある。
- イ ステップアッププログラム委員会と各分掌、学年との連携や役割分担を明確にし、学校教育活動全体を通して効果的な取組とする必要がある。

3 次年度に向けて

- ア ピア・サポートトレーニングからピアサポート活動へと、取り組みを深化させるための計画を立案する。
- イ 校内研修をより充実させ、ピア・サポート活動への理解の深化や子ども理解支援ツール「ほっと」やASSESS（アセス）の効果的な活用法の研究を進める。